第3章　ドゥキ

3－1．ドゥキの世界とサールの世界

荷物を持ってそんなに移動してばかりでは大変だ、ドゥキ（苦痛に悩む人）だ。

ヒラ氏のこのひとことにより、筆者はM村に受け入れられ、調査は始まった。ドゥキという言葉が用いられたとき、その背景に、どのような世界が想像されていたのだろうか。

本稿のここまでの議論に倣い、ドゥキという言葉がM村のなかでどのように用いられていたのか記録を探ってみると、以下のような記述が見つかる。

プラジャはドゥキだ、ガリブ（貧しい）だと言って、国王は私たちに開発を持ってきてくれました（60代の男性）。

先日、郡庁に行って「私たちはプラジャ、チェパン、ドゥキだからジャギール（jāgīr N. 給料を受け取る職業）が手に入ったら嬉しいのですが」と郡の政治家に訴えましたが、今は空きがないからと言い、取りあってくれませんでした（20代の男性）。

このような発話から浮かび上がるドゥキとは、開発を受けるべき貧しい者、同情を誘う援助を得るべき存在のことであり、それが「プラジャ」や「チェパン」という自民族の状況と結びつけられていることがわかる。これは前章のサールの世界でみた開発の波に乗れないプラジャの姿とほとんど変わりがない。

筆者が、そのようなドゥキの世界のなかの一員として捉えられていたとは考え難い。それは、筆者が村で挨拶回りをしたとき、筆者をサールと呼びつつ一緒について来てくれた青年たちが、日本から筆者が来たことを知って「この人は丈夫な時計やラジオを作る国、開発の進んだ日本という国から来たんです」と紹介していたからである。村人たちにとって、特定メーカーの名称とともに「ジャパン」は丈夫な機械を作る国として知られており、そうした知識は、特に時計やラジオの購入を検討するような若者、ヒラ氏を含めた中年の男性のあいだで共有されていた。その文脈で言えば、筆者はドゥキとは逆に位置づけられる存在として、捉えられていたと言える。

また、日本という枠組みとは別に、筆者が個人的に貧しく、援助や開発を受けるべき存在として想像された可能性を探ってみる必要もあるが、それについても筆者がザックに沢山の荷物を背負い、また村人たちにお菓子など挨拶の品を配ったことを考えると、否定せざるを得ない。このように、日常的に用いられるドゥキという言葉から想像される象徴世界を筆者の状況に結びつけても、ヒラ氏の言ったドゥキを上手く解釈することができない。

そうなると、このドゥキの世界は、ヒラ氏個人の問題としてドゥキに何が込められているのか探っていくことで、描き始めるほかなくなる。

3－2．最後まで残された者

ヒラ氏は、ドゥキと筆者を表象する際、「荷物を持って移動し続けるのが大変だ」とも言っていた。そこで「荷物を持って移動し続けなくてはならない人」をドゥキに繋がる象徴として捉え、世界の抽出を試みてもよいかもしれない。

ヒラ氏が普段からそのようなことを言っていたなら、分析が即可能になる。だが、残念ながら筆者はヒラ氏がそのような言葉を他の場面で言うのを聞いたことがない。

それでも、実際に「荷物を持って移動し続けなくてはならない人」の姿はM村やその周辺で普段から頻繁に見かけるものである。それは、行商人である。では、ヒラ氏は行商人に対して普段何を語り、どのような態度をとっていたのだろうか。

M村に訪れる行商人は、手織りの男性用腰巻きを売るネワール商人、インド製の既製服やアルミニウムの鍋、食器を山のように持ってやって来るインド系の商人、女性のピアスなど装飾品の修理販売に来る金銀細工職人、鎌や斧などの刃物の手入れと販売に来る鉄鍛冶職人、そして子ブタやニワトリ、あるいは石鹸工場に転売するためヨーの種を買い付けに来る近隣の商店主などである。こうした行商人たちは、M村を通過していくことも多いが、商売の途中で夜が更けて、M村に泊まっていくことも少なくない。

その場合、どこかの家に頼んで、無償で食事を出してもらい、ピンネ（縁側）に泊めて貰うことになる。ただ、頻繁にM村に訪れる近隣の商店主たちの泊まる家はあらかじめ決まっていて、それは大抵の場合、その商店主たちと馴染みの深いM村で金持ちとされる数軒である。その場合は家のなかで寝ることがほとんどである。

こうした「荷物を持って移動し続けなくてはならない人」たち、行商人たちが、ヒラ氏にとってのドゥキなのだろうか。ヒラ氏を含めM村の人びとは自らも行商人である。低地のタルーのもとへ竹カゴや果物を持ち込み、籾と交換する。ミート（儀礼的な兄弟関係を結んだ人）の家で交換を終えると、残った竹カゴなどを売るために、タルーの村々を重い荷を担いで行商して廻る。そうした同じ行商人として、荷を担いで移動し続ける大変さは、村の多くの人が知るところであり、それはヒラ氏も同様である。

だが、ヒラ氏がこうした行商人たちに進んで家に泊まるように声をかけることは、ほとんどなかった。むしろ、近隣のバザールからやって来た行商人が宿を探して夕方やって来たときに拒否していたくらいで、否定的な態度をとることのほうが多かった。「どうせ、どこかで宿は見つかるさ」。泊まるところを探し歩く行商人をやり過ごしたあとに、彼はそう言っていた（実際、その行商人はすぐに泊めてくれる家を見つけた）。このことを考えると、「荷物を持って移動しなくてはならない」行商人は、宿を探し歩いていても、必ずしもドゥキと見なされない、と言うことができる。

では、彼は筆者を含め、どのような人を受け入れたのか。筆者を訪ねて来た人以外で、ヒラ氏宅に泊まった人たちは、筆者の知る限り2組である（筆者に気遣って断ってくれたこともあったようなので、筆者がいなければもっと多くの人が泊まることになったのかもしれない）。1組は筆者の前にヒラ氏の家に滞在していた簡易水道の建設指導に来ていた技術者たちであり、もう1組は遠い都市から迷い込んできたという

サーカスの団員の親子であった。ヒラ氏は両者を受け入れた理由として「誰も泊めてあげる人がいなかったから」ということをあげる。それは、のちに語られた、筆者を受け入れた理由と同じであった。

こうしてみると、ドゥキとは「荷物を持って移動しなくてはならない人」のなかの「誰にも泊めてもらえず行き場を失い、最後まで残された者」とでも言うことができる。では、ヒラ氏はこうしたドゥキに対して宿を与えることで自らの優位な立場を誇示し、自己満足を得ていたのだろうか。だが、それも彼の筆者に対する態度から否定される。ヒラ氏は筆者の食事（毎日のように村人たちに招待してもらいご馳走になっていた）について、「他の家から呼ばれず、食べる場所がなかったらこの家で食べたらいい」として、祭のとき以外には積極的に筆者に食事を出そうとしなかったのである。つまり、食事にしても本当に困っていたら助けるというスタンスを彼はとり、何かを積極的に与え、それによって喜ぶ様子は見せなかったのである。

だとしたら、ヒラ氏は「最後まで残された者」であるドゥキにどのような共感を抱き、手を差し伸べたのだろうか。あるいは、その裏にどのような世界があり、彼にそのような態度を取らせるように働きかけたのだろうか。

3－3．ドゥキとライフヒストリー

ここで、ヒラ氏がどうしてドゥキとして筆者を受け入れたのか、「最後まで残った者」に手を差しのばしたのか考察し、その行為の背景にある世界を描いていくためには、彼の日常的な語りや行動で反復される傾向、つまり外的世界に対する行動様式としてのパーソナリティを抽出していく必要がある[1]。そこで以下では、ヒラ氏自身や家族など周囲の人びとの語りから、ヒラ氏のごく短いライフヒストリーをまとめ、彼のパーソナリティに影響を与えたり、あるいは、パーソナリティの現れと思われるような出来事をいくつか抜き出したい。

ヒラ氏は、M村のなかで、最も大柄で体格のよい人である。トウモロコシの収穫作業がM村でおこなわれたとき、30人ほどの荷の重さを量ったことがあったが、彼の荷の重さはそのなかで1, 2を争うものだった。また、彼の親戚が喧嘩に巻き込まれたとき、そこに加勢に行った彼は（結局喧嘩はすぐに終わったが）、帰りがけ筆者に自分たち兄弟（彼と一緒にそこへ駆けつけた父系のイトコも体格がよい）と喧嘩して勝てる者はこの村にいない、と語っていたように、彼自身体力に自信を持っているようだった。

彼の話し方には、独特の雰囲気がある。低い声で、ゆっくりと、そして木訥な感じで話す。あるとき、M村の親戚を訪ねたプラジャの女性が、はじめて彼と会って挨拶を交わし、その後、親戚の家に着いてから「（あんな話し方をする）彼はラタ（愚鈍な）なの」と家人に聞いているところに出くわしたことがある。村人は「とんでもない、彼はとてもバト（利口な）で、畑も沢山作ってやり手なんだよ」と答えていたが、彼の話し方が特徴的なことと村人が彼をどう捉えているのかが、ここに示されている。

ヒラ氏は、まだ物心が付く前に父親を亡くしている。彼の父は隣村に住む親戚の子供の食い初め式に出掛け、帰りの山道で酒に酔っていたために道を踏み外し転落した、ということである。彼に父親のことを訊いても「何も覚えていない」と言う。筆者は

お父さんが亡くなっていなければよかったのにと思うことはあるかと訊いてみたことがある。答えは以下のとおりだった。

> そう思うことはあるよ。農作業が忙しいとき、家で留守番をしてくれたらいいと思うし、お父さんがいたらもっと勉強できたのにと思うよ。お父さんがいなくて、ノートやペン、授業料が払えなくて学校をやめたんだから。

父親というものに、ヒラ氏はどのような想像をしているのか訊いてみたのだが、この答えを見る限りでは、生活上の問題については留守番という消極的な意味づけしかおこなわず、むしろ、勉強、つまり教育の問題で支えてくれる父親像を期待し、想像しているように思える。

彼は、父親が亡くなる以前から、そして亡くなったあとも父の兄、つまり伯父の家族と同居していた（出入り口は共通だが、家の内部は、それぞれ囲炉裏を持つ2つの部屋に分けられ、食事も別々だった）。伯父には2人の夫人リムロさんとドビさんがおり（ドビさんは40歳を過ぎて夫を亡くしたがスダム氏と再婚した）、息子夫婦と孫（男子）が同居していたが、息子と孫を病気で亡くしている（息子の妻は近所の男性と再婚した）。伯父のスダム氏は、マーパンデ（大シャーマン）で、村のほとんどの父系親族のトンコロンを司り、また、毎晩のように訪れる病人の治療儀礼もおこなっていた。また、スダム氏は無類のロクシ（蒸留酒）好きで、村でロクシを作っているところがあると、マーパンデ（大シャーマン）の特権とばかりに無心に行くのだった。そんなスダム氏を図々しいと言う村人もいたが、多くの人が「愛する」、冗談好きの楽しい人物だった。また、治療儀礼を通じて、人びとの生活の相談に乗る社会性の高い人物でもあった。筆者も一度腹痛の治療を頼んだときに、その原因が「村人たちの愛情におまえが応えきれていないことにある」と言われ、村人たちとの関係を見つめ直したことがある。ヒラ氏が伯父を通じて、異界に触れ、また、夜ごとに村人が訪れる環境に馴染み、村内の社会生活について多くを学んだことは想像に難くない。

ヒラ氏が子供の頃、この伯父が農作業の一部を手伝ってくれてはいたが、家計はあくまで別で、まだ小さかったヒラ氏の兄のプレム氏、そして2人の姉が母親のダマンチさんと一緒に種々の農作業を何とかこなしていた。姉のひとり、エティミさんは、「昔はプレムがまだ小さくて、十分に犂で畑を犂けなかったので、私も犂を使ったりと大変でした（犂は男性が使うものとM村ではよく言われる）」と言う。ただ、この頃の話はヒラ氏から聞いたことがない。

やがて姉たちが嫁ぎ、ヒラ氏と兄のプレム氏も結婚した。プレム氏は隣村から花嫁トゥーリさんを迎えて女子2人と男子1人をもうけたが、ヒラ氏と1997年頃まで同居を続けた。ヒラ氏はまだ15歳ほどの年齢で村内のスンさんと結婚した。スンさんは当時まだ小さく、「2人ともまだ子供でした」。ヒラ氏は「この家で彼女と兄と妹のように育ったんです」と言う。スンさんが15歳になったとき長女が生まれている。その後、長男、次女、次男、三女と子供が生まれ、5歳までの子供の死亡率が50パーセント前後にもなるこの村（筆者調べ）で、全員が元気に育っている。

その後、伯父のスダム氏の息子と孫が相次いで亡くなり、逆に兄弟で伯父の手伝い

もするようになった。伯父の畑を犂き、また、治療儀礼で供犠がおこなわれれば、その後始末をするようになった。だが、そのような手伝いは生計が別である以上、無償ではない。後でコメのアム（ご飯）など謝礼を受け取る（他人ならアムとは別に定量の穀物を受け取ることになる）。そうした伯父との一定の距離感はその後も保たれていた。伯父はヒラ氏が32歳のときに90歳近くで亡くなった。第一夫人が先に亡くなり、それを嘆きつつ数ヶ月後にあとを追うようにして逝ってしまったと、彼を看取った家族は言う。酒好きだったスダム氏は、最後まで酒を探して飲み、つまみの魚を川で捕ってくるよう、ヒラ氏と兄のプレム氏に頼んでいた。その後、「私はもうひとりだ」と寂しがっていた第二夫人も、伯父の死から1年も経たないうちに亡くなった。ヒラ氏は伯父の死について「他の誰が死んでも何とも思わなかったけれど、伯父が死んだときだけは、妙な気分だった」と言う。

ヒラ氏は、伯父の家族と一定の距離を保ちながらもともに暮らし、末っ子として母と2人の姉、そして兄に囲まれ幼年期を過ごしたわけだが、子供の頃の家族の話や、父親の話を自らすることはなかった。そんなヒラ氏が子供の頃の思い出を語ったことがある。それは、G先生のことである。G先生の思い出話を他の人がしていたときに、その話の輪に加わり、G先生に対する自らの思いを語り始めたのだった。では、どんな話なのか。それは、G先生に叩かれたことである。他の人が、どんなに「彼は良い教師だった、熱心だった」と言っても、ヒラ氏は「G先生は自分を叩いたから嫌いだった。今でも腹立たしく思うくらいだ。彼は本当によく叩く教師だった」と言って譲らない。確かにG先生は叩くことはあったと他の村人も認める。だが、ほとんどの人はそれをG先生の熱心さと結びつけ好意的に捉えているのに、ヒラ氏は決してそのような解釈は受け入れず、怒りを治めようとはしない。彼はそのように何度も叩かれ、それが嫌で結局学校を辞めたのだと言う。先の父親がいなかったから勉強を諦めたという発言とは矛盾するが、G先生についての話の流れでは、あくまで叩かれたことが原因として話される。普段温厚で冷静な彼が、G先生については「叩く」ことをひたすら強調し、他の部分を見つめようとしないのは、筆者には意外に思われた。彼にとってG先生に叩かれたことは、何か特別な意味を持っているのだろうか。

彼はそうして学校を辞めるまで、成績の良い生徒だったと村人たちから言われる。筆者ものちにヒラ氏の親族に教えてもらい知ったのだが、彼は奨学生にも選ばれ、郡庁のある街の寄宿制の学校に送られる寸前まで行ったそうなのである。その進学を辞めさせたのは、G先生ではなく、ヒラ氏の母親ダマンチさんだった。彼女は、普段から無口な人で、自分や家族について自ら積極的に話すのを聞いたことがない。また、最近では年を取ったと言い、個人単位の現金や家畜の所有が認められているこの村にあっても、家畜の子が生まれるとそれを売って自分の財産とはせずに、すべて娘や孫に与えている、そのような人である。

彼自身は、それについて語ろうとしないが、親戚のある女性は言う。「母親が、息子が心配だ、街に連れて行かれてどうにかされてしまうんじゃないかと言って、辞めさせたんです。母親が泣いて嫌がって、結局親族が連れ戻しに行ったんですよ」。横にいるダマンチさんはバツが悪そうに言う。「心配だったんですよ。本当に」。それに構わずその女性は続ける。「奨学生で郡庁に行ったプラジャは皆、給料取りになっていますよ。隣村のAさんも、K村のBさんも・・・。ああ、Cさんは、戻ってから

農業をしているだけですね。行っていれば、この人も今頃は給料取りになっていたかもしれない。でも、そんなことはないわね。やっぱり今でも農民だわ」。

そのときの状況をある教員はこう言う。「他の生徒は怖がり、嫌がったのに、ヒラ氏は行くって言ったんです。でも出発してからお母さんが泣いて反対して、結局連れ戻されたんです」。

筆者は彼の父親に関する思いを訊いた以外、ヒラ氏に少年時代の話をこちらから質問はせず、彼が自ら進んで語ったこと、彼について家族や村人が普段言及することだけを記録してきたので、彼の身体的な自己イメージ、少年期の記憶についての語り、少年期の出来事とそれについての家族の語りは、以上のように限られたものしかない。しかし、ここではヒラ氏が、G先生が自分を叩いたことを強調すること、奨学生としての進学を母親に心配されて断念したこと、この2つの出来事を確認して、さらに先に進むことにしたい。

3－4．一方的に話す者への不快感

つぎに、ヒラ氏が筆者と出会って以降、どのように人について語り、評価していたのか取り上げることにする。そこから少年期の出来事と現在の状況との関係について考えてみたい。

まず、教育を受け、高校レベルまで進学した村のエリートとでもいえる若者たちについて、彼が何を語っているのか今一度詳しく見てみたい。前述のとおり、ヒラ氏は教育の問題と父親のイメージを結びつけて語っていたが、それと現在の教育の状況に対する解釈とどのような関わりがあるのか。

> 若者たちが職を探しに街やバザールに足繁く通っているのを見て、「学校で勉強し、職を求めてバザールへ行っても、結局何にもならない。食べていけないじゃないか」。
>
> また、そのようなエリート的な若者たちが「昔の祖先、爺さんたちはブッディ（知性）がなかった。ラタだった。ジャンガリ（野人、未開人）だったんです。今の自分たちは、もっと進んだところまで来ましたが」と言うのを聞いて、「ああいうティタ（若者）たちは、どうしようもない。役に立たない」。
>
> また、そうした若者がラジオやカセットなどを街で買ってきたのを見て、そのバッテリーがすぐに切れてしまうことを指摘しながら、「パハード（山地）ではバザールのものは役に立たない」。

このように、勉強を途中で断念したことを無念に思っていても、彼は高い教育を受けることを現在評価しているわけではない。また、自分の子供に対しても特別教育熱心でもなく、「教育を受けたからといって何になるのか」と普段からよく言う。また、そうした高い教育を受けた人たちが教育を受けていない者を馬鹿にするような素振りを見せて「排除」しようとすると、それを強く批判する。また、そういった人たち

が積極的に導入しようとする電化製品などの物品などに対しても、冷めた反応を見せる。

一方、そうした若者をビカシ（改良品種）と言って非難し、「プラジャはソージョな民族なんだ。愛情を持った民族なんだ」と訴える人や、トンコロンや祭で若者が歌うネパール語の民謡に対抗して、この地方で「ローロー」や「カンチー」と言われるプラジャ語の民謡を大声で歌うブド（年寄り）を見ても、同情を寄せることはない。むしろ「ああいうブドは、役に立たない」と言い、さらに「自分たちの民族はどうしようもない」と話を続ける。

「高い教育を受けること」、「バザールのもの」、というのが、「プラジャの存在イメージ」と対置されているのは前章でも論じたが、これはプラジャの内部と外部の対立と置き替えることもできる。

そうした外部的なものに、ヒラ氏がどのような態度をとっていたのか、さらに見ていくと、ある傾向が浮かび上がってくる。

筆者が来たので日本語や英語を習いたいという人たちを見て、「日本語や英語を習っても自分たち農民には何の役にも立たない」。

村の近くにできた公立のヘルスポストについて話したときのこと。ヒラ氏は、一度試しに行ってみたと話しながら「ヘルスポストの医者もパンデのように適当なことを言うな」と言う。筆者がなぜそう思うのか尋ねてみると「本当は病気ではなかったんだが、行ってみたんだ。そうしたら、何か病名を言って薬をくれた。それで適当、いい加減だってわかったんだよ」。筆者が、パンデのところにも病気でもないのに行ったりするのか訊くと、「パンデは将来のことも占うから、いつ行ってもいいんだよ。行けば何か言うから」と話す。それを聞いていたスンさんは「だったら、なぜ、パンデのところに治療に行くんだい。夜、病気の子供を抱えて遠くまでわざわざ行くことないでしょう。ああ、こんなことを言うから私は頭にくるんだ」とヒラ氏に怒る。ヒラ氏は「パンデのところへは、子供が病気でそのまま家にいても辛いから行くだけさ」と言って笑った。

ある政治家がM村に来て、演説をした。「今日は、昔からの付き合いがあるから来ました。これからは新しい開発の時代です。今度こそは我々が政権を担う番です。そうなれば、物価も安くできます。そのためには、皆で一致して我々を支持しなくてはなりません」。このような話を聴き、家に帰る道中、ヒラ氏は言う。「村人たちは、政治家があんなふうに話すときには、はい、はいって肯いているけれど、結局自分の考えで投票するんだ。あんな演説は、何のためにもならないよ」。

ヒラ氏の兄、プレム氏がM村の村長に立候補したことを知ったヒラ氏は、「なぜ、そんなことをするんだ」と言って責める。さらに筆者には「ああいう仕事は嫌いなんだ」とこぼす。プレム氏は「こういう仕事をすると外

の世界のことがわかるようになって、ためになるからだ」と答える。

ある日、筆者の留守中にヒラ氏宅を民族調査のために訪れたネパール人学生や開発スタッフたちがどのような人たちだったのか、ヒラ氏とスンさんが筆者に話してくれたときのことである。まず、スンさんがこう切り出した。「皆食事をしても、お礼のひとつも置いていかない。そのくせ、コメのご飯を出さないと、プラジャはこんなものを食べるのかと文句を言ったり、馬鹿にしたりする」。それを聞いてヒラ氏はこう付け足した。「勝手なことを言うネパーリ（nepālī N. ネパール人、ネパール語話者）は嫌いだ。彼らは私たちをチェパン、チェパン、遅れた民族と言って好き勝手なことを書いているんだ」。「そう、だから私も絶対に家のなかには入れないの。調べたいから入れて欲しいって言われても。どうせ、汚いとか何とか言われるだけだし。本当に何を言われるか、わかったもんじゃない」。

筆者が連れてきた日本人たちには概ね好感が持てると語るヒラ氏だが、ヒラ氏が一緒にいる横で、筆者が日本から来た友人と日本語でしばらく話をしていると、「キーキーとサルのように日本人は話すんだな」と言われた。

M村を訪れたある女性が夜遅くまで 2，3 人でネパール語の民謡を歌っていたのを見て、「あの娘はプラジャなのにギャーギャー騒いで自分ばかりで楽しんでよくない」。

ヒラ氏のこうした態度を見ていると、外部的な物の魅力や権力に安易に流されるのを批判すること（教育、バザールの品、日本語、ヘルスポストの医師、政治家に対する態度）、そのような権力的な場に立つことに否定的なこと（村長に立候補したプレム氏への態度）、また、自分たちの話を聞かずに一方的に話したり、書く者に対して不快感を示すこと（勝手なことを書くネパーリ、ヒラ氏を無視して話す日本人、自分ばかり楽しむプラジャへの評価）、そうした傾向が読み取れる。そして、こうした外部的なものに対抗しようと内部的なプラジャの論理を振りかざすことにも批判的であることが付け加えられる。

このような発言だけを見ているとヒラ氏は、他人に対して攻撃的だという印象を残すかもしれないが、実際には彼が普段非常に温厚であるために、こうした他人を罵るような批判が筆者の印象に強く残り、それを記録した、ということをここで付け足しておきたい。

さて、外部的なものに冷静な態度をとることは、同時に現実的な志向をとることにも繋がっているように見える。ヒラ氏は単に外部的なものが語りかける夢や物語を頭から否定するのではなく、それに疑いを挟みつづけ、現実に役立つのか慎重に見極めようとする。その際、「現実」として想像され、「接続」されるのは、「パハード」や「農民」という象徴である。そして「パハードの農民には役に立たない」というのが外部からやって来る夢物語に対する殺し文句になる。また、逆に「農民は、食べる

ために働かなくてはならない」とか「パハードでは、休む暇がない」というのがスンさんや近所の親族と日常について語り合うとき、よく用いられる表現である。実際、M村とその周辺に暮らすプラジャの人びとにとって、労働の投入量が生産を決める大きな要素になっていて、人びとは一年中忙しく農作業に追われている、という状況はある[2]。所有する土地が少なくても、焼畑なら無償で貸してくれる人は多くあり、やる気さえあれば、あるいは、人を多く雇えれば、生産を延ばすことができるからである[3]。

ヒラ氏は外部的なものなら何に対してもその是非の判断を留保したり、否定的な態度をとっていたりしたわけではない。例えば、前章で見たような交易先や出先などで、旅人に気を遣って話の相手をしてくれる人には、ロクサ・ミャントで良い人だと言って評価する。

また、ヒラ氏は重労働や面倒な仕事を嫌がらずによくやる人にも、ミャント（嫌がらずによくする）で偉い、と言ってよく褒める。ヒラ氏は、自らの日常に対して「働かなくてはならない」と言い、他人に対しても「よく働く」ことは評価するのである。筆者が彼に最も評価されたのも、彼が水田を開墾する際、河原の岩を彼と一緒に動かしたことである。彼はそうした力仕事を評価し、自らも厭わずにおこなう。ちなみに、兄のプレム氏は、その水田造成には興味を示さなかった。プレム氏自身は、それを「雨季に川が氾濫したら、どうせ流されてしまうから」と説明する。プレム氏は、手先が器用で自他ともにそれを認めている一方で、ヒラ氏は「自分は兄に比べて細かい仕事が得意ではない」と言う。兄弟のあいだで、仕事に対する関心の方向を分けているようにも見える。

ここまでヒラ氏の日常行動における傾向を見てきたが、先の子供の頃の記憶、出来事を含め、これらは彼がドゥキである「最後まで残された者」を受け入れることと、どう繋がったものとして理解できるのだろうか。まずは、ヒラ氏が強調するG先生に叩かれた記憶から見直していこう。

3－5．「子供が叩かれる」空想と現実主義

「G先生が叩く」という記憶は、「子供である自分が教師に叩かれる」ということと「他の子が教師に叩かれる」ということから成り立つ。それは実際に起きた出来事だが、不快感の伴うものとして強調して語られるときには、ある種の空想がそこに重ねられているとも言える。「叩くのは教師が熱心だから」という解釈が、理想化されたある種の空想として受け取れるのと同様である。また、不快感は単なる記憶ではなく、そうした空想のたびに新たに生じている、と捉えることができる。

そのような「子供が叩かれる」空想について論じたものに、フロイトの「子供が叩かれる」という論文（1996（1919））がある。それは、精神分析の治療を受けようとする人びとに「子供が叩かれる」という空想に耽ったことを告白する患者の数が多いことから書かれたものだが、フロイトは「疾患が顕在化しないために精神分析に訪れなかったさらに多数の人びとも、こうした空想に耽っているのではないだろうか」とし、一般的な問題として論じている[4]。

フロイトは、幼児期の「子供が叩かれる」空想には3つの段階があるとする。第一

段階は「お父さんが子供を叩いている」という空想、第二段階は「お父さんが私を叩く」という空想、そして第三段階では空想する人物が空想の風景から姿を消し、ときにお父さんが学校の教師などに姿を変えて「見知らぬ子供たちを叩く」ような空想になるとしている。

ここからフロイトは、まず「お父さんが子供を叩く」という第一段階の表現を「お父さんが別の子供を叩いている。お父さんは私だけを愛している」こととして捉える。第二段階の空想は「私がお父さんに叩かれる。お父さんは私を愛していない」と捉え直す。第三段階の空想は、第二段階の空想が変換されたもので、見知らぬ子供たちは本人の身代わりだとする。そして、第二、第三の段階では、罪の意識と自慰的な快感が現れていることを指摘する。ここでフロイトは、父親は罪の意識と繋がる権力や法といった超越的なものの象徴であり、その受容の際にマゾヒスティックな快感が伴うとしている。

「お父さん」が教師などに姿を変えるということから、ヒラ氏のG先生が叩くという記憶を、第二段階の空想「私がお父さんに叩かれる。お父さんは私を愛していない」や第三段階の空想に結びつけることが可能である。フロイトは第二段階の空想をする人びとは、父親のような地位に立ちうるような人物に対する敏感さを発達させ、また逆にそうした父親のような地位の人から侮辱を感じやすい人は、父親から叩かれるという空想を実現する、としている。そう考えると、ヒラ氏が「教師が叩く」記憶を語るというのは、彼がそうした権力などの超越的なものに対する感受性が高い、ということになり、それはヒラ氏の日常的な行動傾向と重なることになる。

そして、そのような傾向は、実は冒頭の「プラジャである」という名乗りの場面でも見られたのである。

それは、筆者がいつものようにM村の家々で話を訊いてまわり、ヒラ氏の家に帰ってきたときのことだった。その頃バザールで手に入れた荔枝や改良品種のマンゴーの苗をヒラ氏とともに前庭に植えていた。その成長を見るのが筆者の日々の楽しみになっていた。帰って早速見ると、苗の一部が家畜に食べられてしまっていた。筆者はそれを嘆いた。ヒラ氏の顔を見ると「この村では家畜が放し飼いだから、どうしようもない」と言う。筆者は彼の醒めた態度にさらに落胆し「貴方たちのために何かできればと思っていたんですが、一体何をしたらよいのですか」と彼に迫った。

彼はこう答えた。

何もしなくていい。

そして、そのあと冒頭の「自分たちの民族名はプラジャだと書いて欲しい」という発言に繋がったのである。つまり、一見依頼に見える言葉の裏には、筆者のお仕着せに対する抵抗があったと考えられるのである。彼はさらにこう続けた。

自分たちにはブッディがないから、ずっとこのままだ。

ここでも、ヒラ氏は、一方的に与えようとする者、つまり権力的な態度を示す者への感受性を示しているように見える。ただ、フロイトの議論とは異なり、ヒラ氏の日

常を見る限りで、こうした権力的な者についての記憶に快感が付随している様子はない。むしろ、一貫してこうした権力的なものに不快感を露わにしているように見える。こうした権力的なものに対する不快感はどのようなもので、なぜ生じているのだろうか。

ここではそれを検証する十分な資料があるとは言い難いが、ドゥキの象徴世界を描き出すために、ヒラ氏の子供時代に起きた奨学生を辞めることになった出来事に注目して、議論を進めることにしたい。

まず、この時代には「学校で勉強しないとラタになってしまう」という言説が広がっていたことを押さえておきたい。ラタはネパール語で役に立たない道具や人などを示すので、フロイト流に言えば、去勢された状態と言い替えることができるだろう。そうなると、この状況は、子供たちが「家の外に出なくてはならない。さもないと去勢された状態になってしまう」と言われているのと同様だと理解できる。また、外の世界を知らない子供たちにとって、家の外は「家の外に出たら去勢される」という不安をもたらしたに違いない。特にそれが街という多くの他者が住む、家から遠く離れた場所の話ならなおさらだろう。

そのような状況のなかで、ヒラ氏は家に留まって去勢された状態になるのを嫌い、街に出ることを決意した、と考えられる。だが、彼はそこで母親の愛情によって止められ、村のなかに留まらざるを得なくなる。しかし、彼は母親のもとで精神的に安住することはできない。去勢された状態になってしまうのだから。では、彼はそこからどこに向かおうとしたのだろうか。

筆者は、彼はそこにずっと立ち往生しているのではないかと考える。つまり、そのような父親的な状況と母親的な状況のあいだで、落ち着く場所を見いだせないまま、ダブルバインドになったままでいるのではないだろうか。そして、プラジャ開発委員会がプロジェクトをおこない、低地で進む開発状況を見るたびに、ヒラ氏は同様なダブルバンド的な状況を追体験してきたのではないだろうか。

フロイト（1997（1940））は、エディプス・コンプレックスと超自我との関係について論じるところで、そのような矛盾した状況で子供はやがて去勢から眼を背けるようになり、ナルシシズム的関心から結局父親と同化し、自我理想、超自我を獲得すると言う。だが、ヒラ氏の場合はここから母親を「排除」して父親（教育、街、開発）と同化する（「包摂」される）道をとっているようには見えない。彼はそうするのではなく、父親を冷静に見きわめることを選んだように見える。そもそも父親は一体どんな姿をしているのか、と見定めるように。そして、そのような父親、権力の姿をしっかりと見据え、理想と現実のギャップを見いだすことが彼にとっての自我理想、超自我になったように筆者には思える。

フロイトは上記の場合、ナルシシズム的関心は退行的に父親へ向かうと言うが、父親にも母親にも向けることのできないヒラ氏のナルシシズム的関心は、そこに留まった自らの身体、特にその力に向けられたように思われる。そして、彼は、その力による労働、労働を注ぐ大地にそうした関心を拡げている、と捉えることができる。

そのようななかで、彼に対して父親のようにふるまう権力的な存在、一方的に定言命法を告げる者は、彼にどのような者として映るのか。それは「おまえは去勢されているのではないか」と問う姿となって、彼に不快感を抱かせてもおかしくない。

彼はそのように父親の場所にも、母親の場所にも留まらず、立ち往生する者として自己を想像し、最後まで落ち着く場所を得られず困っている者、ドゥキを自らに似た境遇にいるものとして捉え、共感を抱いていたのかもしれない。その意味で、異人と言うより自己イメージを直接そこに投影していたのかもしれない。あるいは、最後まで残された特別マージナルな存在である異人に声を掛け、話を聴くことで、彼は近づくことのできなかった父親とは別の新たな外部を知り、それに充足感を覚えていたのかもしれない。

ヒラ氏は、ドゥキとして泊めた人びとから聴いた話を嬉しそうに筆者に話してくれていた。そして、筆者にも毎日「何か話をしてくれ、物語を聴かせてくれ」と言い、筆者のつたないネパール語やプラジャ語にも辛抱強く耳を傾け続けていた。夜遅くなることも少なくなかったが、他の人が床に向かっても一向に気にせず、話を聴き続ける。そんなとき、話を聴くことに対する彼の特別な熱情が感じられるのである。

ヒラ氏がドゥキを受け入れた理由は、共感によるものなのか、異人の語る物語への興味によるものなのか、どちらかはっきりしない。あるいは、どちらかということもなく、両方の理由が重なっているのかもしれない。いずれにしても、彼の身に起こった特別な出来事が、彼と他の村人とのあいだに差異をつくった、と解釈することができる。

ヒラ氏個人に関する問題を、限られた資料から論じてきた。彼がドゥキに手を差し伸べる背景には、他にも様々な方向からアプローチ可能だろう。例えば、伯父や母、兄や妻などの家族関係、あるいは村内の政治関係に焦点を当てた分析もできるはずである。ここまで示した分析は、そのような可能性のひとつでしかない[5]。ヒラ氏個人を理解しようとする道も、プラジャ・イメージ理解の道に劣らず、果てしなく遠く、複雑である。

だが、上記のように開発がもたらすものとしてドゥキの問題を捉えたとき、それは彼個人の問題に収まらなくなる。彼ほど、幼少からどっちつかずの矛盾した状態に追い込まれた村人はいなかったかもしれない。それが、彼と他の村人との差を生んだと考えることもできる。だが、プラジャの外に出なければラタになる、出たらラタとして扱われる、という矛盾を投げかけてくる現実は、開発に囲い込まれた人びとが共有するものであり、それは彼の身に起こった出来事同様、人びとに事後的に働きかけ続けているのである[6]。

では、人びとはそうしたダブルバインド的状況からどこに向かおうとしているのだろうか。人びとはもはやあらゆる開発や進歩的な物語に懐疑的になっているように思われる。開発への反応がそれを示しているし、出稼ぎにも皆行かないと口を揃える。

> 出掛けたところで、54 日間働き 200Rs.しか稼げなかった。村で働いても一日 20Rs.には最低なるというのに。

そんな若者の話を聞くことができる。

だからといって、現状に満足しているかといえば、そうとも言えない。多くの人は穀物の自給がままならない貧しさを嘆き、現金収入の少なさを問題視している。

そのような状況のなかで、人びとが熱心におこなっているように見えるのは、水田

の開墾と家族計画プログラムによるパイプカットの実施である。人びとは、それまで「どうせ川が増水したら流されてしまう」と放置していた河辺の土地を熱心に開墾するようになった。

また、今は何とか食べていけるが、将来はわからないと、男性たちは避妊手術を受けるようになった。はじめは様子見の人が多かったものの、何ともないと見るや、男子を持つほとんどの男性がパイプカットを終えてしまった。なかには、手術後の傷の回復が思わしくない人もいたのだが、そのようなことを気にする人はいなかった。周囲の他の民族では、避妊手術を受ける男性はほとんどいないのにも関わらずである。

このように人びとは、自らの土地資源を見つめ直し、また、それを消費する自己を見つめ直している。それは、土地資源や自己を新たに「切断＝接続」しようとすることで、新たな世界を切り開こうとしているように見える。

このようにドゥキの世界からは、権力的な言説が現実に沿ったものなのか見つめ、目の前の土地や身体という現実を「切断＝接続」し新たな可能性を探っていく、そのような二重の現実主義を持った「プラジャの存在イメージ」が立ち上がるのである。

注

1 こうしたパーソナリティの問題を、文化や社会の問題と結びつけ、その接点について考察を深めた民族誌にメドゥーサの髪（オベーセーカラ 1988（1981））がある。オベーセーカラは、女性苦行者たちのもつれ髪に注目し、それを個人的な象徴とする。そして、その起源について記述したうえで、女性苦行者たちが、そういった個人的な象徴をどのように操作しているのか、個人史の記述のなかで明らかにする。さらに、その象徴が、他者と個人とを統合するのにどのように役立つのか、議論を展開している。本章の議論もドゥキという象徴のヒラ氏個人にとっての意味を、先生や開発などの外部的な権力に繋がる象徴の操作から探るものだと言える。なお、ヒラ氏は、宗教的な職能者であるパンデではないし、トランスはもとより、夢について筆者に語ることはなかったので、日常的な会話を資料として多用している。

2 このような生業における労働力の重要性は橘（1991）で詳しく論じた。

3 こうした労働を重視する傾向は、Rai（1985：59）の「チェパンは、成功するもしないもその人の才能と努力次第だと考える」という指摘と重なり合う。しかし、そういうなかにあっても彼は特に「働かなくては食べていけない」ということを強調していたように思われる。

4 そこで空想に耽るというのは、「大きな快楽が備給され、快楽に満ちた自体愛的な満足をもたらす行為で終わる」という結果を生むことであり、ヒラ氏が示す不快感とは全く逆の問題を扱っていることになるが、まったく逆ということは、何かの契機で反転したと捉えることも可能であり、初めから議論の俎上に乗せることが不適当とは言えないだろう。また、フロイトがあげる事例のほとんどは、異性の親が叩く空想だが、フロイトは異性に見える場合でも、本来的には「親」は「父親」であること、また、「父親」が「教師」の姿になることも指摘しており、その点でも、フロイトの議論を参考にすることに問題はないと考えられる。実際、フロイトはこの空想に対する学校の影響の大きさも指摘している。フロイトは、教師が他の子供を叩く場面を他の生徒たちと目撃すると、子供にそれ以前の空想が蘇ると言う。そして、空想が強化され、内容が驚くほど修正される。それ以来、空想の中では「無数の」子供たちが叩かれるのだとする。そして、こうした空想を回想する人はこの叩かれる空想を、6 歳以降の学校時代の印象だけに結びつけようとするが、これは空想がそれ以前に存在していたために、決して成功しないと言う。

5 オベーセーカラはインフォーマントがほとんど重要とは思っていない幼児期の細目の検証によるよりも、司祭の言葉によって心理学的な側面を立証する方が容易である（オベーセーカラ（1988（1981）：255）と言うが、筆者の理解もこれと同様である。ただし、司祭ではないヒラ氏の象徴を探るために、本稿では日常的な権力に対する語りに注目した。

6 ヒラ氏が経験した奨学生の断念の記憶、教師に叩かれた記憶、父親を早くに亡くしたことは、何度も繰り返し経験されているという意味で精神的外傷とも言えるかもしれな

いが、それが直接の原因となって彼のパーソナリティが形成されたとは言えない。それらは、フロイトが「マジック・メモについてのノート」のなかで論じるように、「その持続的な痕跡は形成されず、記憶の基礎はこれに接触する他のシステムが担当している」（フロイト 1996（1925）：310）のである。